

【論文】

オノマトペの語形パターンに関する一考察

吉 永 尚

1. はじめに

オノマトペの語形パターンと意味の関連については、最近の先行研究でたびたび指摘されているが、先行研究の内容をまとめると概ね以下のようなになる。語末が「ピュッ」「ぞっ」など促音で終わるオノマトペでは変化性、瞬間性を表わし、「ジャー」「ピー」など長音のオノマトペでは強調や持続性を表わす。また、「カタン」「バタン」など語末が「ン」のオノマトペは終結と結果を表わし、「ドタリ」「さりり」などの語末の「リ」は動作・状況を一纏まりとして表わす働きがあり、それぞれ音韻的要因との関連が示唆されている。また、「リンリン」「しくしく」など同じ音形が繰り返される「●○●○」型は、畳語形により動作・状態の反復継続を表わすという¹⁾。しかし、具体的な例を挙げて詳細な記述をした研究は管見の限り僅少である。

本稿では、これらのオノマトペを形態的特徴により五つのタイプに分類し、意味との関連について具体的な例を挙げて観察し、各タイプの語形パターンについて、形態と意味の相関の観点から考察を加える。

2. 語形パターンの分類

本章では、オノマトペの基本部分の音節数が一音節或いは二音節で、それぞれの語末に促音、長音、撥音、「リ」が付加されたものを考察対象として扱い、語形パターンとして五つに分類する。現代日本語には基本部分が三音節以上のオノマトペも存在するが、標準語では少数であり、考察から省くこととし、別稿で論じることとする²⁾。擬音語と思われるものはカタカナ、擬態語と思われるものはひらがなで表記する。

2.1 基本部分が一音節の語

オノマトペの基本部分（語基）が一音節（一モーラ）の場合の一般的な語型を挙げる。

- ①X型：ふ（と）
- ②X一型：サー、ザー、ぼー、じー、ぬー
- ③XーX一型：ザーザー、フーフー、スースー
- ④Xン型：ボン、バン、しゅん、きゅん、しゃん

- ⑤X N X N型：ドンドン、ガンガン、ずんずん、るんるん
- ⑥X ーN型：カーン、ゴーン、がーん、つーん
- ⑦X ッ型：ポッ、ジュッ、ほっ、はっ、ぞっ
- ⑧X ッ X 型：キャッキヤ、チッチ、かっか、とっと（と）
- ⑨X ーッ型：シューッ、ジャッ、すーっ、ぼーっ

2.2 基本部分が二音節の語

オノマトペの基本部分（語基）が二音節（二モーラ）の場合の一般的な語型を挙げる³⁾。

- ⑩XY 型：カチャ、ぐい、そよ、がば、ぴた
- ⑪XY リ型：ガタリ、バタリ、ガブリ、ペタリ、どきり、びくり
- ⑫XY ッ型：ガチャッ、ボキッ、バキッ、ポタッ、ぐらっ、よろっ
- ⑬XY N型：コツン、ポキン、パリン、だらん、きよとん、ずきん
- ⑭XY ー型：プシュー、ほやー、じとー、ふらー
- ⑮XYXY 型：バリバリ、ゴロゴロ、ガタガタ、いらいら、めきめき
- ⑯X ッ Y リ型：バツタリ、どつきり、がっかり、もっちり、ぼっちゃり
- ⑰X ッ Y N型：ゴクン、ポッチャン、カクン、ポットン、どっきん
- ⑱X N Y リ型：しょんぼり、ほんやり、うんざり、にんまり、どんより
- ⑲XY N XY N型：チャボンチャボン、べろんべろん、ぶるんぶるん
- ⑳XYZY 型：ペチャクチャ、うろちょろ、てきぱき、ちやほや

上記のほかに、促音、長音、撥音で強調したもの、それらを反復したものなどの変形が可能であり、話者の主観や状況によってかなり自由に表現できると思われる。

2.3 語形パターンの分類

前節の①～⑳の語型から基本的なものを選んで考察対象とし、語形パターンの形態的特徴により五つのタイプに分類する⁴⁾。

〈A タイプ（語末促音型）〉

- ⑦X ッ型：ポッ、ジュッ、ほっ、はっ、ぞっ
- ⑫XY ッ型：ガチャッ、ボキッ、バキッ、ポタッ、ぐらっ、よろっ

〈B タイプ（語末長音型）〉

- ②X ー型：サー、ザー、ほー、じー、ぬー
- ⑭XY ー型：プシュー、ほやー、じとー、ふらー

〈C タイプ（語末撥音型）〉

- ④X N型：ボン、バン、しゅん、きゅん、しゃん
- ⑬XY N型：コツン、ポキン、パリン、だらん、きよとん、ずきん

〈D タイプ（語末「リ」型）〉

⑪XYリ型：ガタリ、バタリ、ガブリ、ペたり、どきり、びくり

〈Eタイプ（同形反復型）〉

⑮XYXY型：バリバリ、ゴロゴロ、ガタガタ、いらいら、めきめき

オノマトペの副詞用法では「と」が付加される場合が多いが、本稿では「と」の付加は意味機能には関わらないとみなし、付加されていない場合と同様に扱う⁵⁾。

3. 各タイプの特徴

前章で分類したA～Eタイプについて、例を挙げて特徴を観察する。

3.1 Aタイプ（語末促音型）

例：ボツ、ジュツ、ほっ、はっ、ぞっ、ガチャツ、ボキツ、バキツ、ポタツ、ぐらっ、よろっ

語末が促音のオノマトペは一般的に変化性、瞬間性を表わすとされ、促音の音声的性質と関連していると思われる。語末を長音に置き換えた形と比較する。

- (1) シュツという音がした瞬間、マッチに火がついた。
- (2) ? シューという音がした瞬間、マッチに火がついた⁶⁾。
- (3) シューという音を立てて風船から空気が抜けている。

瞬間的事態では(1)は自然であるのに対し、(2)は容認度が低い。しかし、(3)の様に事態の継続を表わす場面では自然である。一般的に瞬間や継続の時間的性質が表れにくいとされる心身の状態を表す擬態語でも、語末促音型には瞬間的な心理変化が含意されている。

- (4) 車に接触しそうになった瞬間はっとした。
- (5)* 車に接触しそうになった瞬間はーとした。(息を吐く音という解釈を除く)

上例においても、(4)に比べ(5)の容認度が低く、瞬間性と促音の音感との関連が考えられる。また、小野(2007)によると、「っ」は音や動作・状況などの瞬間的な区切りを表現しているとし、「きーっ」「だらーっ」など継続性のあるものでも、「っ」が最後に入ることにより、一区切りつくことを表わしているという⁷⁾。語末に促音が挿入され息継ぎのような区切りとして機能するからであると考えられる。

3.2 Bタイプ（語末長音型）

例：サー、ザー、ほー、じー、ぬー、プシュー、ほやー、じとー、ふらー

語末が長音のオノマトペは一般的に強調や持続性を表わすとされるが、長音の持つ伸展性を伴う音感との関連が直感的に判断される。語末を促音に置き換えた形と比較する。

- (6) 昨日からテレビが壊れてザーという音しか聞こえない。
- (7) ? 昨日からテレビが壊れてザツという音しか聞こえない。

一定時間の継続を表わす事態では(6)は自然であるのに対し、(7)は容認度が低い。小野

(2007) では、長音型はオノマトペを断ち切る力が最も弱いと指摘し、語末に「っ」「ん」「り」が付加されることが多い理由を、長音は事態の継続のみ表わすので区切りを含意するためには、「っ」「ん」「り」の付加が必須になると分析している⁸⁾。

3.3 C タイプ (語末撥音型)

例：ボン、バン、しゅん、きゅん、しゃん、コツン、ポキン、パリン、だらん、きよとん、ずきん

語末が撥音のオノマトペは、動作や状況が終結し、その結果が余韻を残していることを表わすと指摘されている。撥音「ん」の音声的性質と関連していると思われるが、終結を表わしにくい長音に語末を置き換えた形と比較する。

(8) プラスティックのスプーンがポキンと折れてしまった。

(9)? プラスティックのスプーンがポキーと折れてしまった。

(10) プラスティックのスプーンがポキッと折れてしまった。

終結の事態では (8) は自然であるのに対し、(9) の容認度は低い。瞬間的事態を表わす (10) でも自然に容認されるが、折れるという瞬間的事態のみを表わし、結果の余韻までは含意していないと思われる。つまり、A タイプ (語末促音型) では瞬間性のほかに結果の残存は含意しないが、C タイプでは「しゃん」「だらん」など結果が残存していることを意味する。

2.2 節で挙げた⑩X ッ Y ン型「ゴクッ、ポッチャン、カクッ、ポットン、どっきん」も動作や状況の終結や結果の残存を表わし、語末撥音型のバリエーションと判断される。しかし、この型では第一モーラの後に「っ」が挿入されて一区切りを表わしているため、動作や状況の終結に一定の心理的停頓がある事を強調していると思われる。

3.4 D タイプ (語末「り」型)

例：ガタリ、バタリ、ガブリ、ぺたり、どきり、びくり

語末が「り」のオノマトペは、動作や状況を一纏まりとして表わすと指摘される。「り」の音声的性質と関連しているかどうかについては今後の課題であるが、瞬間的事態を主として表わす語末促音型の「ガタッ」「バタッ」に比べ、「ガタリ」「バタリ」では一連の動作や状況が一段落したことの意味合いが強いと思われる。瞬間性の強い促音、終結を表わしにくい長音と語末を置き換えた形を比較する。

(11) 犬が子供のぬいぐるみをガブッと噛んだ。

(12) 犬が子供のぬいぐるみをガブリと噛んだ。

(13)? 犬が子供のぬいぐるみをガブーと噛んだ。

(11) は動作がより瞬間的であることを表しており、(12) ではしっかりと噛んで、あとに噛み跡が残っているような結果の残存を表す意味合いが強⁹⁾。 (13) では終結を表わしにくい長音の性質のため、他の2例と比べると容認度が低い。

2.2 節で挙げた⑩X ッ Y リ型「バツタリ、どつきり、がっかり、もっちり、ぽっちゃり」⑪X
ン Y リ型「しょんぼり、ほんやり、うんざり、にんまり、どんより」も動作や状況を一纏まり
として表わし、語末「リ」型のバリエーションと判断される。しかし、これらの型では第一モー
ラの後に「っ」や「ん」が挿入されることによって、一区切りや強調を表わしていると思われ
る。

3.5 E タイプ (同形反復型)

例：バリバリ、ゴロゴロ、ガタガタ、いらいら、めきめき

同じ音形が繰り返される「●○●○」型は、一般的に畳語の形態によって動作・状態の反復や
継続を表わすと指摘されている。語末に促音を付加した非反復形と比較する。

(13) ものすごい夕立で雷のゴロゴロという音が鳴り響いた。

(14) ?ものすごい夕立で雷のゴロツという音が鳴り響いた。

継続性のある事態では (13) は自然である。(14) は容認度が低いが、瞬間的な雷鳴を表わす
文脈では「雷のゴロツという音」が使える場合も考えられる。同形反復型は擬音語だけではなく
「いらいら」「はらはら」「もじもじ」「うとうと」など、人間の動作や感覚を表わす擬態語にも多
く見られる。これらの語尾に「する」がついた「いらいらする」「もじもじする」などの擬態語
動詞では、「朝からいらいらしている」「さっきからずっともじもじしている」のように「てい
る」の形で動作・状態の継続を意味するものが多く見られる。

また、2.2 節で挙げた⑫XY ン XY ン型「チャポンチャポン、べろんべろん、ぷるんぷるん」
も動作や状況の反復や継続を表わし同形反復型のバリエーションと判断されるが、「ん」が挿入
されることによって語意がより強調されていると思われる。「ん」のほかにも、「ぷるんぷるん」
「ぶかりぶかり」「ひらーひらー」のように「っ」、「り」、「ー」が挿入された形も同形反復型のバ
リエーションと思われるが、いずれも前述の音声的特性を伴った強調形と判断される。

4. 各タイプのまとめ

五つの語形タイプのオノマトベについて形態と意味の関与について観察した結果、以下のよう
に総括できると考えられる。

- A タイプ：語末促音型のオノマトベは瞬間や変化を表すが、音の空白で強制的に区切りをつ
ける促音の音声的性質と関連していると考えられる。
- B タイプ：語末長音型のオノマトベは持続や強調を表わすが、長音の持つ伸展性を伴った音感
との関連が考えられる。したがって、長音型は瞬間や変化を表しにくく、継続性が
強いこと事態の終結も表しにくいという特徴がある。
- C タイプ：語末撥音型のオノマトベは動作や状況が終結し、その結果が余韻を残していること
を表わし、撥音「ん」の音声的性質と関連していると思われる。また、「っ」で終

わる A タイプでは結果の残存は意味しないが、撥音型では「しゃん」「だらん」など結果が残存していることを表す。「ゴククン、ポッチャン、カククン」など第一モーラの後に「っ」が挿入されたバリエーションにおいても、動作や状況の終結や結果の残存を表わしている。

D タイプ：語末「り」型のオノマトペは動作や状況を一纏まりとして表わす働きがある。「り」の音声的性質と関連しているかどうかについては今後の課題として検証したい。「バッタリ、どつきり、しょんぼり、うんざり」など第一モーラの後に「っ」や「ん」が挿入されたバリエーションにおいても、動作や状況が一段落したことを意味している。

E タイプ：同形反復型のオノマトペは畳語の形態によって動作・状態の反復や継続を表わし、擬音語だけではなく「いらいら」「はらはら」「もじもじ」「うとうと」など、人間の動作や心的状況を表わす擬態語にも多く見られる。これらの語尾に「する」がついた「いらいらする」「もじもじする」などの擬態語動詞では、アスペクトを表すものもある。

5. 今後の課題

オノマトペの形態と意味の関与については、慎重な調査研究が必要である。より多くの用例を対象とした詳細な調査を今後の課題としたい。日本語教育の分野においても、オノマトペ教育に関する研究は未だ捗々しい進展はなく、使用頻度の高いオノマトペについての効率的な教育の必要性が注目されている。オノマトペの形態によって意味や機能を推し量ることができるようになる事は、日本語学習において大きな手掛かりとなるであろう。

本稿は学術研究助成基金基盤研究 (C)「心身の状態を表すオノマトペの習得研究」(課題番号：15K02670 (H 27-29)) の一環として作成されました。

注

- 1) 浜野 (2014)、田守 (1993)、角岡 (2007)、小野 (2007) の記述を参考にした。
- 2) 浅野千鶴子 (編) (1978)『オノマトペ辞典』、小野正弘 (編) (2007)『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』の語形を参考にした。
- 3) 上記以外に機械音などを表わす「X イーン型」(ウィーン、プイーン、グイーン、ギューイーン)、「XYY (Y) 型」(プルルル、トゥルルル、ピロロロ、キュルル、シュルル) などがある。
- 4) 考察対象以外のものはいずれも基本型の強調形であり、本稿で取り扱う基本的な語形パターンのバリエーションと見なし、考察から省いた。
- 5) 影山 (2005) では「「あっさりとする」の「と」は擬態語「あっさり」の状態性と「する」が要求する出来事性のギャップを埋める橋渡しの役を果たす」としている。「すかっとする」のように「っ」で終わるものの音声補助的役割を担うものと「きりきりと痛む」のような恣意的なものがあるが、いずれも本質的な意味用法には関与しないと考える。小野 (2007) は「じっと」「ちゃんと」など以外、「と」の付かない形を基本形としており、「と」の有無による相違についての言及は特にない。

- 6) 一般的な文法性判断を基準として「？」は不自然、「*」は容認されないことを表す。
- 7) 小野（2007）では長音を含み継続性を含意するものも、語末に促音を付加することで変化性、瞬間性が強制的に含意されるという。
- 8) 小野（2007）では「っ」「ん」「り」「ー」相互の結びつき方によって、「っ」が最もオノマトペを断ち切る力が強く、「ん」がそれに続き、「ー」が最も弱いと分析している。
- 9) 「ガブッ」より「ガブリ」の方が「一段落」の含意が強く、また嘯み幅が深いという指摘を参考にした。（名古屋大学杉村泰氏のコメントによる）

参考文献

- Akita, Kimi (2009) *A grammar of sound-symbolic words in Japanese: Theoretical Approachs to iconic and Lexical Properties of Mimetics*. Ph.D. dissertation, Kobe University.
- Kakehi, Hisao, Ikuhiro Tamori, Lawrence Schourup (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*, 2 vols. Mouton de Gruyter.
- Tsujimura, Natsuko (2001) "Revisiting the two-dimensional approach to mimetics: A reply to Kita (1997)," *Linguistics* 39, 409-418.
- 浅野千鶴子（編）（1978）『オノマトペ辞典』角川書店。
- 小野正弘（編）（2007）『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館。
- 影山太郎（2005）「擬態語動詞の語彙概念構造」第2回中日理論言語研究会発表要旨。
- 角岡賢一（2007）『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版。
- 小林隆（2018）『感性の方言学』ひつじ書房。
- 杉村泰（2017）「日本語のオノマトペ「ヒリヒリ、ヒリッ、ヒリリ」、「ビリビリ、ビリッ、ビリリ」、「ピリピリ、ピリッ、ピリリ」の記述的研究」*ことばの科学* 31, 111-130
- 田守育啓（1993）「日本語オノマトペの統語範疇」覚壽雄・田守育啓編『オノマトピア擬音・擬態語の楽園』、勁草書房。
- 中石ゆうこ・坂本沙織・酒井弘（2014）「「はらはら」は「元気な様子」？－中国語を母語とする学習者を対象としたオノマトペと静止画のマッチング実験の結果から－」『中国語話者のための日本語教育研究』第5号、日中言語文化出版社。
- 浜野祥子（2014）『日本語のオノマトペ』くろしお出版。
- 吉永尚（2008）『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院。
- 吉永尚（2016）「心身の状況を表す擬態語動詞についての素性分析」*園田学園女子大学論文集* 第50号, 21-28.
- 吉永尚（2016）「感情・感覚を表す擬態語の語彙特性についての考察－擬態語動詞の観察を中心に－」*日本言語学会第153回大会発表予稿集*。
- 吉永尚（2017）「心身の状況を表す擬態語の習得についての考察－中国語話者の作文データをもとに－」*園田学園女子大学論文集*第51号, 93-103.
- 吉永尚・廣部久美子（2019）『介護・看護の日中英対訳用語集－「ずきずき」「はっと」は中国語・英語でどう言う？－』和泉書院。

〔よしなが なお 日本語教育・日本語学〕